

[教育方法一般]

感謝の気持ちを表現し、協力し助け合う態度を育てる実践の試み

—新潟県中越地震の体験を踏まえて—

水谷 徹平*

1 はじめに

平成16年10月23日、午後5時56分。新潟県中越地方は、マグニチュード6.8の大地震に襲われた。小千谷市では、10月23日から10月31日の9日間で、震度6強が2回、震度6弱が2回、震度5が11回と大きく揺れ、人的被害は小学生を含む13人の尊い命が失われ、重傷120人、軽傷665人。住家被害は全壊632件など、大きな被害を受けた。

文部科学省は、被災地に派遣可能なスクールカウンセラーを確保した。そして、県が実施する「こころの健康調査」等に基づき、臨時健康診断の実施や心のケアを含む健康相談活動を行うなどして、心の健康問題に適切に取り組むよう指示した。

学校では、児童の心のケアに努め、地震の体験を今後の生活に生かすことができるように活動を行った。児童は、支援を受けたことへの感謝の気持ちを自然に感じていた。その感謝の気持ちを表現し、学習の中で価値付けをしながら、自分ができることをするという態度を育むことが、この体験を今後の生活に生かすものであると考え、本実践を行った。

2 主題設定の理由

3年生23名は、10月23日に発生した新潟県中越地震で被災し、一時は全員が普段生活している家屋から避難し、避難所や車庫などで生活することとなった。幸い、地震によるけがをした児童はいなかったが、普段生活している家や町並みが破壊され、繰り返し発生した余震で、今までに経験したことのない不安な毎日を過ごした。

地震発生から2週間後の11月8日、授業を再開し、児童の安全確保及び心のケアに留意しながら、一日も早い日常の学校生活への復旧を目指した。不自由な学校・家庭生活の中にも、ボランティアや救援物資など、様々な方からの支援と思いをいただき、児童は感謝の気持ちを持ち、協力して困難に打ち勝つことの大切さを、身をもって感じていた。

児童の受けた心的外傷を緩和するためにも、また、児童が体験したことや思ったことを風化させずに今後の生活に生かしていくためにも、学級の中で具体的な活動が必要であると感じた。このため、大きく、(1)心のケアに関すること、(2)様々な体験や思いを生活に生かすことの、二つの活動を行った。(1)は、授業再開から約1ヶ月以内を目処に、(2)については約1年以内を目処に行うこととした。また、必要に応じて「心のケア」は継続していく。

児童がこの体験を今後の生活に生かしていくためには、(1)で気持ちが安定した後に行う(2)の活動が大切となる。地震後は、支援を受けたことへの感謝の気持ちを振り返り、表現・発信する取り組みを行った。

本研究では、心のケアに留意しながら、様々な支援を受けたことを振り返り、感謝の気持ちを表現する一連の取り組みを通して、児童の心がどのように変化し、今後の生活に生かそうという態度が育まれたかを考察する。

3 研究の仮説

正しい知識や今後の見通しを学び、児童の心的外傷体験を共有化して感謝の気持ちを表現することで、児童の心理状態は安定するであろう。また、体験を今後の生活に生かして協力し、助け合う態度を育むことができるであろう。

4 研究の内容と方法

(1) 心のケアに関すること (日常の復旧・楽しい思い出の想起、児童の見立てという対応 (「心の健康調査」及び

*小千谷市立千田小学校

児童観察とカウンセリング)、「正しい知識、見通しを知ろう」「みんなの気持ちを言い合おう」

- (2) 体験や思いを生活に生かすこと(「感謝の気持ちを表現し、発信しよう」「千田の被害と復興を調べ、1年間を振り返ろう」,「仮設住宅訪問で劇を発表しよう」)

以上のことを実践し、「心の健康調査」及び継続的な児童観察を基に、児童の心理状態の変化を考察する。また、体験を今後の生活に生かし、協力し助け合おうとする態度を、「感謝の気持ちをもつこと」と「自分が今できることを自主的にすること」と捉え、作文などの表現・発信及び、仮設住宅訪問を目指しての活動で評価する児童の関心・意欲・態度などから、生活に生かそうとしているかを考察する。

5 具体的実践と成果

(1) 心のケア

① 日常の復旧・楽しい思い出の想起

久留(1997)は、「PTSD; Post-traumatic Stress Disorder」(外傷後ストレス障害)は、人間の存在、生命に危機的影響を及ぼす『異常な状況』における『正常な反応』¹⁾と言っている。PTSDが発生する可能性がある場合、「できる限り、普段どおりの生活を続けるべきである」²⁾とある。授業再開以前に、教室をほぼ復旧し、学校生活をできるだけ地震以前と同じく行った。また、体育館が使えるようになってからは、休み時間にドッチボールや鬼遊びなど、集団遊びを多く行った。避難生活で、運動遊びがしづらい環境でもあり、心からの笑顔を見せる児童が多くいた。1学期に行ったお楽しみ会を思い出し、2学期お楽しみ会を計画するなど、楽しい思い出の想起と、「未来に楽しいことがある」という期待感をもたせるよう活動を行った。

② 児童の見立てと対応 「心の健康調査」及び児童観察とカウンセリング

今回の新潟県中越地震は、異常な状況であり、児童がPTSDになる可能性が高い。そこで、県から指示のあった「心の健康調査」を行い、児童の見立ての参考とし、児童観察を加味して必要な児童にカウンセリングを行った。

「心の健康調査」は、第1回を2004年11月10日、第2回を同年12月1日、第3回を2005年9月7日に行った。第1回は精神症状期にあたり、「多動になったり、逆に何をしてもうつ状態になったりする人もいる」³⁾時期である。頭痛・不眠など身体症状が出る児童もおり、受容的・支持的に対応した。

表1の通り、否定的認知にあたる、「悲しい気持ちが分かってもえられない気がする」、「自分が悪いと思ってしまう」、「何を頼りにしていいかわからない」、「元気になるのが心配」項目にチェックの付いている児童については、特に配慮をし、児童観察をもとに個別にカウンセリングをするとともに、個別に心配なことに対して、必ず元に戻ることを伝えた。

聞き取り内容	第1回	第2回	第3回	合計
地震の事が気になって仕方がない	12	5	5	22
地震について夢を見た	6	2	2	10
はっとしてしまう	7	8	9	24
悲しい気持ちがわかってもらえない気がする	6	2	2	10
暗くなる	8	5	3	16
緊張していてちょっとしたことが気になる	10	7	3	20
物音に対して敏感になっている	12	10	10	32
よく眠れない	6	5	7	18
集中できない	8	6	7	21
ちょっとしたことで腹が立つ	6	5	5	16
いらいらする	8	3	4	15
学校に来るのがやっつである	4	0	1	5
食欲が無い	7	1	3	11
おなかの調子が悪い	5	3	5	13
身体がきつい	9	4	1	14
頭が重い	4	5	3	12
自分が悪いと思ってしまう	1	0	1	2
何を頼りにしていいのかわからない	5	2	1	8
元気になるのが心配	8	1	2	11
早く忘れてしまいたい	16	9	10	35
合計	148	83	84	315

表1 心の健康調査

③ 正しい知識、見通しを知ろう [学級活動]

新潟県中越教育事務所のwebページでは、震災後の児童・生徒の心のケアの中で「児童生徒や保護者に適切な情報の提供を行うことが大切である。」また、「異常な状態においては、『不安になったり様々な反応が表れるのが当たり前であり、心配はない』ということを見習って、児童生徒にまずしっかりと教える。」⁴⁾と述べている。地震後、児童から、「どうしてこんなことになったのかわからない」「これから、今まで以上の大きな地震がくるのではないか」という不安が多く聞かれた。また、「〇〇日に大きな余震がくる」などの憶測や流言飛語が、児童を不安にさせることがあった。それらの不安を少しでも軽減させるために、現状で客観的であると思われる事実を子どもたちに説明した。3年生に理解できる範囲で地震のメカニズムを説明し、本震以上の余震が来る可能性は限りなく少ないこと、ライフラインの復旧の目処がどうなっているかなど、分かっている情報を担任から知らせた。また、「不安に思っていることはおかしいことではなく、自然である。先生もとても怖いのが、初めよりはだんだんよくなってきた」ことを伝えた。

地震後、児童に伝えたこと

- どうして地震が起こったか → 定期的におこる自然現象で、誰も悪くないこと

- 余震と今後の生活について → 余震は本震より小さく、生活は復旧すること
- 不安な気持ちは自然であること → 自分だけがおかしいのではないこと

このことで、すぐに不安は消すことはできないが、児童は客観的な知識をもつことができたと考えられる。

④ みんなの気持ちを言い合おう [学級活動] ～感情の共有化を行う～

久留(1997)は、「PTSDの集団発生が予測される場合には、直後に『ディブリーフィング』、時間の経過とともに『グリーフ・セラピー』を行い、『自助グループ』などによる「癒し」の場を設定し、集団的援助をする必要がある。」⁵⁾と、集団での感情の共有化による癒しの重要性について述べている。図1に示すように、災害のもたらす影響として、心的外傷から回復しなかった場合に、PTSDになる可能性がある。⁶⁾「心のケア」の中には、ストレスを緩和させる活動も含まれることも考え、専門的なピア・サポート要員がいない状況であったが、思いを吐き出し、体験を共有化する機会を設定した。

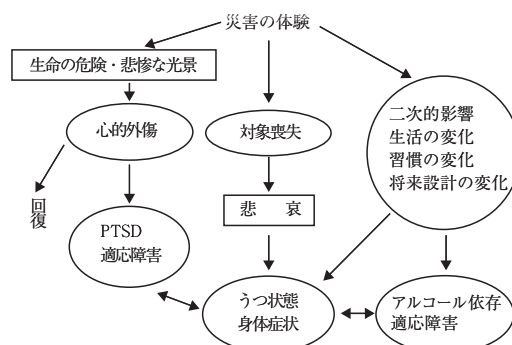


図1 災害体験とその後の影響⁶⁾

まず、担任が十日町で被災した時の状況を話し、「地震の時に誰といたのか」、「地震の時にどうしたのか」、「その時どんな気持ちだったのか」などの話をした。その後、児童が話す時間を確保した。「言いたくないことは言わなくてもよい」、「嫌な気持ちになったら話をしたり聞いたりしなくてもよい」という約束で行った。感情の共有化を目指した活動であるが、地震とは関係のない話で安心することでもねらいは達成すると考えた。

「みんなの気持ちを言い合おう」での約束

- 言いたくないことは言わなくてもよい。
- 嫌な気持ちになったら話をしたり聞いたりしなくてもよい。
- 地震と関係のない話題でもよい。

座席が近くの児童6名ほどで話を行った。初め、「地震の時、僕は独りでいて怖かった」、「家や建物が崩れてもうだめかと思った」、「私もそうだった」など地震時や地震直後の恐怖を共有する話が多かったが、時間経過とともに、「ずっと車庫で過ごしていて、退屈だった」、「早く友達と遊びたかった」、「避難所で、自衛隊の人が遊んでくれた」など、その後の避難生活や支援物資のありがたさ、ボランティアや自衛隊員に遊んだりしてもらったりしたことに移り変わり、「早く体育館でドッジボールがしたいね」、「遠足はどうなるのかな」など、これからの生活のことや、遊びや学校行事などの話に移り変わる児童たちが多かった。再体験による傷を負わないか心配であったが、児童の様子からは、久しぶりに会った友達とのおしゃべりを笑顔で楽しんでいる様子が見られた。

(2) 様々な体験や思いを生活に生かす

① 感謝の気持ちを表現し、発信しよう [道徳] ～「がんばれ中越の子どもたち」掲示板を見て～

地震後、たくさんの心のこもった支援と勇気をいただいた。ボランティア、応援メッセージ、支援物資。ライフラインも復旧し、児童もかなり落ち着きを取り戻してきた。そこで、3学期、「道徳」の中で、受けた支援を考える機会を作った。今までもらった多くの励ましの手紙やボランティアの方々にしてもらったことを、また、「がんばれ中越の子どもたち」という全国からの応援メッセージを掲載するweb上の掲示板も題材として紹介した。

子どもたちは地震を振り返り、たくさんの人に助けていただいたことを振り返った。児童のあげたうれしかったことには、「家族に守ってもらったこと」、「自衛隊やボランティアからしてもらったこと」、「たくさんの支援物資」、「応援メッセージや手紙」などが、そのときのうれしさとともに多くあげられた。そして今、自分たちができることを考えた。「スマトラ沖地震で被災した人に募金する」、「自分たちが精一杯がんばって生きる」、「お世話になった人たちにお礼の手紙を書く」、「『がんばれ中越の子どもたち』にメッセージ

ぼくは、地しんをくらつてものすこく心にきずができました。だけど、ボランティアの人やいと思ったことを全部言ったら、すつきりしました。後、ひなんとちゅうにいとこのおっちゃんか、「地しんが大変だったね」と言ってひなん所にむかえにきて、いとこの家にひなんさせてくれました。ひなんして、次の日にはチャールハンといこの姉さんが作ってくれました。とてもおいしかったです。二週間後、自分の家に帰ると思ったら病院の宿舎に行きました。だけど、一ヶ月後、自分の家に帰りました。家に帰ったら、いきなり元気になりました。家に帰って一日たつて、学校に行けて、友達にも会えてとてもうれしかったです。これから、いろんな人に迷惑をかけるかもしれないけど、ちよつとは自分で努力したいと思えます。(A児作文)

をくれた人にも返事を書きたい」などの意見が出た。

「伝えよう、感謝の気持ち」ということで、今の気持ちを作文に書いてみようと呼びかけると、児童は思いや感謝の気持ちを鉛筆にこめ、とても一生懸命作文を書く姿が見られた。裏山の崖が崩れ、自宅から長期間、避難を余儀なくされていたA児の作文からは、親戚に心配され、面倒を見てもらったことを喜ぶとともに、学級の仲間と会ったり、家に戻ったりできたという日常への復帰、カウンセラーなどへ気持ちを吐き出したことに対する安心感が綴られている。また、B児は、地震後、余震や音に対して過敏に反応し、不安が晴れない様子であったが、応援のメッセージとともに、たくさんの人が小学校でもボランティア活動してくれたことへの感謝を発表していた。作文には、支援への感謝とともに、自分に何かできることはないかを模索していることが綴られている。児童からは様々な意見が出たが、自分たちができることとして、「今までどおり元気に過ごしていくこと」であるとまとめられた。

なお、児童の作文は、「がんばれ中越の子どもたち」に掲載され、感謝と元気に過ごしていることを発信できた。

② 千田の被害と復興を調べ、1年間を振り返ろう [総合]

地震後、10ヶ月が経過し、2学期の学習が始まった。地震後1年となる日が来月やってくる。「記念日というのは、(被害者にとって) 苦しい時である。記念日をどう取り扱うかを決めるとすれば、その記念日前のよい時期を見計らい、集中的に話し合われるほうがよい⁷⁾」とある。児童と1年目をどうするかについて話し合いをもった。その結果、自分たちの学区である「千谷・小栗田がこんなに復興したということをもとめたい」という意見と、「学区にある仮設住宅を訪問して、仮設住宅に住む方々に、もっともっと元気になってもらいたい」という意見が出た。児童の意見を取り上げ、総合的な学習の時間で千田の地震被害と復興を調べ、1年間を振り返る活動を計画した。

同じように大地震で被災した後、地震について学習し、発信している兵庫県立芦屋高等学校の事例がある。80%の生徒が「地震の学習や震災に関するレポートを書いてよかった」とあるように、「震災体験を文章で表すことや、震災について学習することによって傷ついたところが癒せた⁸⁾」という実践が行われている。そこで、①地震の被害、②復興の様子、③これからの自分という3つの観点で、調べ、まとめるという活動を行った。児童は、自分の体験から建物・道路などの被害、電気・水道・ガスが止まったことによる不便さ、流通が滞ったことによる食料などの物不足などに目をつけ、調べ活動を行った。また、地震は何回くらい起きて震度がどれくらいだったのかを疑問に思い、調べる児童もいた。資料となる具体的な数値や写真などの情報を、書籍やインターネットから調べた。また、地震直後の校舎内・学校周辺が撮影され、公開されている千田小学校webページと、現在の様子を比較し、同じ場所をデジタルカメラで撮影して復興の様子をまとめた。

児童がそれぞれに調べた資料の中から必要なものを選び、児童用ワープロソフトであるジャストスマイル3ページ分に、図2のようにまとめた。調べ活動の中で、有感地震の数の多さや、道路の陥没、建物の倒壊など地震の猛威に改めて驚くとともに、小千谷に駆けつけた自衛隊やハイパーレスキュー、ボランティア、集まった義援金・支援物資の質・量に驚きを隠せなかった。「今、こんなに元気でいられるのは、あの時、たくさんの支援をもらったからだと思った」、「全国の人が、こんなに私たちのために募金をしてくれたことに驚いた」、「道路や水道がどんどん直っていることがよく分かった」など、「これからの自分」には、地震後約1年が経過した児童の気持ちが綴られている。

自分のまとめたレポートを、学級の仲間にはプレゼンテーションし、「新潟県中越大地震、千田の被害と復興」という冊子にまとめて配布した。自分たちが作った冊子を見返すことで、年月が経っても、新潟県中越地震に被災し、立ち直ったことを風化させることなく、これからの生活に生かして欲しいと願う。

③ 仮設住宅訪問で劇を発表しよう [総合]

仮設住宅に住む児童の意見などを参考にしながら、仮設住宅を訪問した場合に、どんなことをしたら喜んでもらえ

わたしは地しんが起きてから、いつわかつたから地しんがとつてもわかつたです。だけど、いろんな小学校から、「がんばって!」とか「地しんを乗り越えて!」や、いろんなメッセージやお手紙の言葉で心が落ち着いてきました。いろんな小学校の人たちがわたしたちやちいさな人たちが心配してくれたり、いろいろな人が助けにきてくれたりしてとても元気が出てきました。元気が出てくるだけじゃなく、勇気もわいてきました。落ち着いてきても、もっと手紙を出してくれるので、地しんやよしんに負けないようにしたいなあと思ひました。それに、何かお返しをしたい気分になりました。(B児作文)

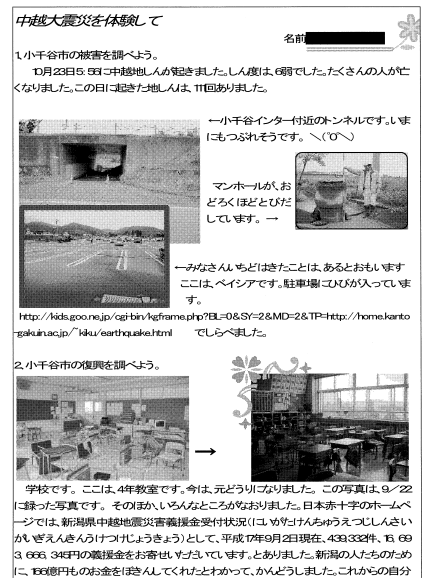


図2 児童の作成したレポート

るかを話し合った。地震後、テレビ会議で交流し、まだ校舎に戻って学習ができていない東山小学校の児童が校区内の仮設住宅にいることを思い出し、交流を継続したいという意見も出てきた。だが、内容を考えるうちに、「仮設住宅にはいろいろな人たちがいるから、迷惑に思う人がいるかもしれない」という問題が生じた。

そこで、「仮設住宅にある集会所に、来たい人だけ来てもらおう」という形とした。招待状やポスター作りを行い、「地震を思い出したくない人がいるかもしれない」という意見を基に、地震とは関係のない発表やゲームで楽しんでもらおうと計画した。



写真1 台本作成会議の様子

現在、児童は自分たちでグループに分かれ、「私たちの元気を伝えよう！げんきっこ物語」という劇作りに取り組んでいる。これは、児童が、「自分たちが一番伝えたいものは自分たちの元気のよさである」という観点で、脚本・演出を考えている劇である。普段の生活の中で、児童が元気いっぱい過ごしている様子を伝えようと、写真1のように、「授業」、「体育」、「休み時間」、「学校行事」という四つのショートストーリーを考え、それぞれのグループに分かれて取り組んでいる。その中には、歌、ダンス、組み体操、コントなど、自分たちも楽しみ、見てくれる人にも楽しんでもらおうという演出が盛りだくさんである。地震から1年となる10月末の完成を目指して、鋭意製作中である。

児童の様子からは、弱者に対する一方的な支援という価値付けではなく、一緒に楽しみたいという考えが出てきたこと、相手が嫌な気持ちにならないように十分配慮しなければいけないという考えが出てきたことから、地震の経験が生活に生かされていると感じた。継続的な交流ができたらと考え、計画をしている。

6 考察

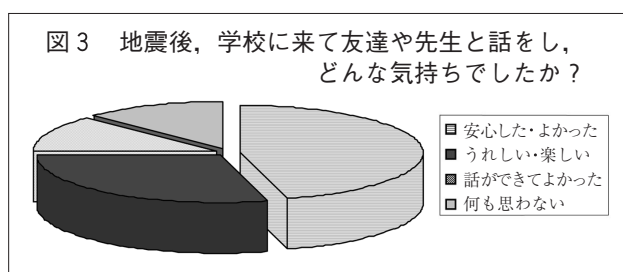
(1) 「心のケア」については、できる限り日常の生活に戻し、「未来への期待感」をもつこと、客観的な情報を知ることができたことが、不安定な精神状態により効果をもたらしたと考えられる。アンケートからも、学校が始まり、友達と話すことで、多くの児童が安心していた。個々に支援が必要な児童には、専門家であるカウンセラーと連携しながら、共感的に話す、チェックを指摘しないなど、正しい知識に裏付けられた対応をすることが効果的に働いたと考えられる。表1にあるように、「心の健康調査」では、第1回のチェック延べ148項目から、2・3回目の80項目代へと大幅に減少している。また、要カウンセリングと判断された児童についても、1・2回目の計11人から、3・4・5回目の計2人へとやはり大幅に減少している。だが、地震後、約1年が経過した第3回調査でも、第2回とほぼ変わらない項目数で不安を訴える児童がいることから分かる通り、不安は簡単に拭えるものではない。未だ心に残る傷があることを忘れず、長期的な視点で見取りと支援、活動を継続する必要がある。

児童観察を通して、最も顕著な効果を見せたのは、「みんなの気持ちを言い合おう」であった。児童は友達と話し、恐怖や不安、喜びなどの感情を共有化することができた。図2のように、「安心した」、「うれしい・楽しい」など、21人が肯定的評価であった。感想を聞くと、「嫌な気持ちを言えたので、嫌なものが心からなくなったと感じた」、「みんな怖いのは一緒だと分かって安心した」などがあつた。ストレスマネジメントのための活動として有効であったと考えられる。

(2) 「様々な体験や思いを生活に生かすこと」に関しては、震災体験を文章で表すことや、震災について学習することによって、鬱積していた気持ちを吐き出し、また、自分を客観的に見つめ直すという意味から、傷ついた心を癒すことができるという側面をもっていると考えられる。感謝の気持ちを持ち、自分にできることを探す行為は、前に進むことである。それを実践し、確かに手ごたえを感じた時、児童にとって大きな満足感を得ることができる活動となる。

図3から分かるように、地震に関して振り返り、感謝の気持ちを発信することは、多くの児童の満足感につながっている。だが、一部の児童(3名)は、「あまり思い出したくない」、「嫌な思い出だから書きたくない」であった。そういった児童には個別に、嫌なことを書いたり話したりしないように指示を出した。まだまだ地震に対する不安があり、体験の思い出すことには踏み込めない。だが、不安の中にも、周囲の様々な人に感謝の気持ちをもっているこ

図3 地震後、学校に来て友達や先生と話し、どんな気持ちでしたか？



とが確認できた。

「感謝の気持ちを振り返り、伝える主観的な活動」と「実際にあった被害とその復興を調べ、まとめる客観的な活動」という、2種類の活動を行ったことで、感情的に整理をすることができたと考えられる。また、地震と関係しない、夢中になれる活動を行っていくことが、心的障害を受けた児童にとって、効果的な「心のケア」となると考えられる。「伝えよう、感謝の気持ち」で児童が書いた作文には、支援や、友達、家族に対する感謝や、自分がこれからできることをがんばりたいという思いが書かれている。「新潟県中越大地震、千田の被害と復興」で書いた、全ての児童のレポートにも、「感謝の気持ち」と、児童によって内容は異なるが、「自分にできること」について考え、実践したいことが書かれていた。「私たちの元気を伝えよう！げんきっこ物語」でも、仮設住宅に住んでいる相手を意識し、嫌な気持ちにさせずに一緒に元気になるという思いで意欲的に取り組んでいる。児童は、あの過酷な経験から、確かに「感謝の気持ちをもつこと」、そして、「自分ができることを自主的にすること」を学び取っていると見える。

以上のことから、児童は実践前から比較して確実に心理状態が安定し、また地震という体験を生活に生かすことができているということが言える。それとともに、指導・活動及び「心のケア」を継続する必要があると言える。

7 おわりに

突発的に児童、保護者、教職員を襲った新潟県中越地震。学校は、「心のケア」という観点から、また、防災教育という観点から、年度当初に計画されていない学習活動を、緊急に、またきめ細やかかつ確実に行う必要があった。実践についての研究や計画に時間がとれず、専門的なカウンセラーが不在のまま、学級の中だけで活動を行わざるを得ないという不十分な部分もあったが、今後も継続して児童の見取りを続け、心に傷を負い、苦しむことがないように、また、少しでも和らげることができるようにしていきたいと考える。何より、現在、子どもたちが楽しそうに学校に通い、笑顔で過ごしていることが本当に感謝しても感謝しきれないことである。

今後の生活の中で、ストレスになりうる壁にぶつかった時に、一般化してごまかしたり、忘れようとしたりするのではなく、自分なりに現実を咀嚼すること、そして、前向きに進んでいこうという行動を児童がとれたならば、それはまさに生きていく上で重要な力をもっていることに他ならない。地震後、約1年経った現在、振り返りの発言の中に、「そういえばそうだった」、「忘れていた」といった発言も多くあり、児童のたくましさとともに、体験の記憶や気持ちが薄れかけていることも感じた。あの激甚災害を体験し、乗り越えたことを風化させてはならない。災害を通じて改めて考えさせられた当たり前の価値に気づき、協力や感謝の大切さをかみ締め、「自分にできることをしよう」、「精一杯生きていこう」という意識をもち続けることが、あの時、中越にいた私たちが学んだことである。そして、そのことは、未だ被害の爪跡残る被災地に生きていく私たちや子どもたちが、後世に伝えていかなければならない重要な価値であると、本実践を通じて心より感じる。

引用・参考文献

- 1) 久留一郎 1997 PTSDの診断的概念と心理査定 ロールシャッハ研究vol.39
- 2) W.ユール, A.ゴールド著;久留一郎訳 2001 スクール・トラウマとその支援:学校における危機管理ガイドブック p39
- 3) 文部科学省 2004 非常災害時における子どもの心のケアのために p7
- 4) 岡本淳子 2005 スクールカウンセラー連絡協議会要約 中越教育事務所
<http://www.pref.niigata.jp/kyoiku/chiiki/chuetsu/kokoro/>
- 5) 久留一郎 1997 前掲1)
- 6) こころのケアセンター編 「災害とトラウマ」(みすず書房)1999年 p160
http://www.bousai.ne.jp/visual/bousai_kensyu/glossary/ko22.html
- 7) W.ユール, A.ゴールド著;久留一郎訳 2001 前掲2)
- 8) 数越達也 2000 「伝えよう大震災をウェブページで~阪神淡路大震災後の防災教育とインターネットによる発信」 IT-Education No5 日本文教出版 <http://homepage2.nifty.com/ja3tvi/gakkou/it/it-ed.html>

図4 地震の学習や震災に関する作文を書いたよかったですか？

